

斜里町立知床博物館協力会（斜里町立知床博物館）
アイヌ語地名から探る希少種の分布と海―川―森のつながりの変遷
～絶滅危惧二枚貝カワシンジュガイを指標に～

調査研究期間：2021年5月1日（土）～2022年3月4日（金）



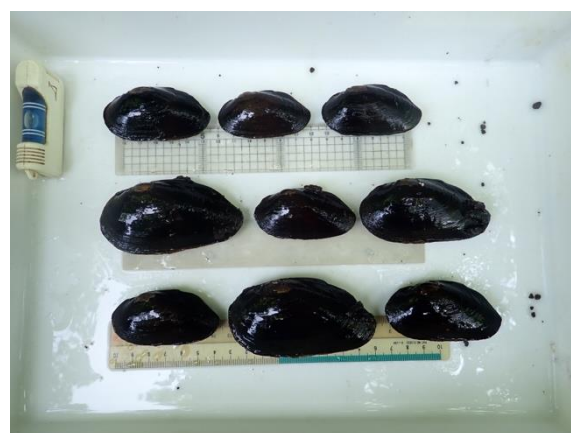
調査した文献の一部



野外調査の様子



河底に刺さるカワシンジュガイ類の様子



採集したカワシンジュガイ類

【調査研究の内容・目的】

- 絶滅危惧種カワシンジュガイ（カワシンジュガイとコガタカワシンジュガイ）は川に棲む二枚貝です。本種の生息には、健全な海、川、森とそれらのつながりを必要とすることから、健全な川環境および海―川―森のつながりを示す指標生物と考えられています。
- 北海道各地に残されたアイヌ語地名を集約し、その地名から絶滅危惧種カワシンジュガイの過去と現在の分布変化を明らかにしました。これにより、過去から現在までの海―川―森のつながりの変遷について考察しました。
- 海―川―森のつながりや人と自然の共生の重要性を再認識する機会を提供しました。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。

1. 調査研究内容の詳細

【調査研究代表者】

- 三浦 一輝（斜里町立知床博物館・斜里町立知床博物館協力会 学芸員・事務局）

【調査研究分担者】

- 宇久村 三世（石狩川流域 湿地・水辺・海岸ネットワーク 事務局）
- 平河内 毅（港区立郷土歴史館 学芸員）
- 能勢 理恵（斜里町立知床博物館協力会 会員）

【実施計画】

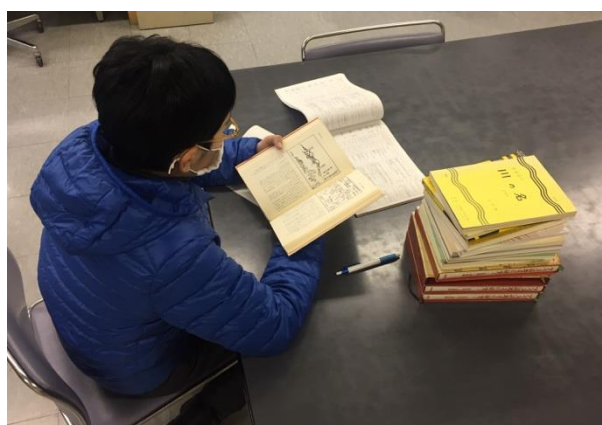
- 1 カ年計画 1 年目

【主な調査研究対象など】

- 北海道各地の現在・過去のアイヌ語地名（ピパやトパなど）を文献調査
- 文献調査から得られた各地名を周って現地調査を行うことで、カワシンジュガイが生息しているか確認



調査した文献の一部



文献調査の様子

1. 文献調査

北海道内の過去から現在のアイヌ語地名は、各地域の研究機関や博物館、有志などが調べ、意味や解釈と併せて書籍や紀要としてまとめられ出版、発行されています。本研究では、全道から各地域のアイヌ語地名に関する書籍や発行物をできる限り収集し、各文献からカワシンジュガイを示す「ピパ」に由来する地名や「トパ（沼貝）」や「セイ（貝殻）」といった地名を抽出して位置を特定し、リスト化しました。また、道内には日本語で「貝」がついた地名にも、過去にアイヌ語地名で「ピパ」がついていた事例が見つかったことから、併せて情報を集めました。65 文献（うちひとつは博物館のHP）の調査の結果、全道の広くからピパ地名が 34 地点、トパ地名が 1 地点、セイ地名が 6 地点、貝地名が 7 地点確認されました。

本結果から、過去には全道で広くカワシンジュガイやその仲間の貝が生息していた可能性が高いことが示されました。これらの情報と今回行った野外調査の結果を合わせることで、過去から現在までの希少種の分布とその時間的な変遷を示せます。また、本種の持つ指標生から健全な川環境や森—川—海をつながりの変遷を伺い知る手がかりになると考えられます。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。



調査河川の様子 1



採集したカワシンジュガイの様子



現存する地名「枇杷牛川（元ピバウシ）」の看板



調査河川の様子 2

2. 現地調査

1の文献調査よりリスト化した河川のうち、ピバに由来する地名を優先しつつ、全部で32河川（ピバ25河川、セイ1河川、トバ1河川、貝5河川）で現地調査を行いました。調査は各河川に1～3の調査区間（1区間の長さは川幅の10倍以上）を設定し、調査員1～2人で箱メガネを用いてカワシンジュガイの生息有無を調べました。また、護岸の状況など現地の様子も確認を行いました。現地調査の結果、ピバ地名25河川のうち2河川（調査したピバ地名のうち8.0%）からカワシンジュガイ類が確認されました。また、トバ、セイ地名からはカワシンジュガイは確認されませんでした。貝地名からは5河川（1つは橋名）中1河川（調査した貝地名のうち20.0%）でカワシンジュガイが確認されました。また、調査河川の多くで護岸や直線化の痕跡がみられ、一部には魚が越えられないような堰堤もありました。

これらの結果から、アイヌ語地名に残る“ピバ地名”を基準とした場合、カワシンジュガイが生息していた河川の9割で本種が確認できない状況だということがわかりました。カワシンジュガイは綺麗で冷たい水や改修されていない川にしか棲むことが難しいこと、また幼生の時に海と川を行き来する回遊魚であるサケ科魚類への寄生できなければ大人になれず、森—川—海のつながりを必要とすることから、カワシンジュガイが生息可能な健全な川環境の多く（約9割）がこれまでに失われてしまった可能性が高いと考えられます。

本事業における成果はカワシンジュガイの基本的な生態情報などを組み合わせることで、海から離れた川や森と海のつながりを一般の人に知ってもらうと共に、過去から現在までの川環境や陸と海のつながりの変遷や、アイヌ語地名という文化的な遺産の重要性を広く普及するための重要な題材になると考えられます。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

2. 本調査研究成果を基に計画・実施可能な 「海の学び」に繋がる博物館活動案

- 博物館活動の形態：カワシンジュガイの生態とアイヌ語地名との関連性をまとめたパネル展示と出前講座の開催
- 実施時期：2022年4～5月頃
- 実施場所：斜里町立知床博物館 姉妹町交流都市記念館1Fロビー、蘭越町貝の館など

【実施内容】

- カワシンジュガイの一般的な生態とアイヌ語地名との関係性を分かり易くまとめたパネル展示を行う。
- 展示物と併せてこれまでに執筆、発行した印刷物の別刷りを置いて頒布する。
- 開期終了後には、知床博物館協力会HPで展示パネルおよび発行物のpdfを閲覧できるようにする。
- 小学校～高校を対象に、川の観察会に関する出前講座を行い、カワシンジュガイとその宿主であるサケ科回遊魚の観察を行う。また、その際のレクチャーにて、得られた調査結果やパネルなどを用いて、海―川―森のつながりやアイヌ語地名といった文化との関連性を伝える。

【他の博物館・機関や地域社会との連携や取り組み内容】

- 蘭越町貝の館にて同じパネルを展示することで、遠方の地域でも広く成果を知ってもらう機会を創出する。
- 学会や論文執筆、発表も行い、他の研究機関や博物館などの施設に展示や発行物の公開に協力してもらうことで、カワシンジュガイや海―川―森のつながりの重要性、自然とアイヌ文化との関係性を知ってもらう機会を増やす。

【特に学校教育との連携について】

- 地元の小中学校の総合学習において、川の生き物の観察会のニーズは高い。また高校の授業のテーマとしても毎年リクエストがある。その際に、本成果も踏まえた内容の観察会とレクチャーの場を提供する。

【事業全体のまとめ】

本事業を通して、北海道に残るアイヌ語地名を調べることで、健全な川環境や海一川一森の指標であるカワシンジュガイの現在の分布と過去の潜在的な分布を明らかにすることができた。また、それらの間接指標から川や周辺環境の時間的な変遷を考察することができた。このことは、今後の希少生物の保全や健全な川環境、海一川一森のつながりの維持、復元に貢献できると考える。加えて、これらの結果は自然分野だけでなく、歴史・民族分野の人にも興味を持ってもらえる教育普及の題材として利用していけると予想される。

本結果を通して、一般向けに成果をまとめたエッセイの発行や頒布を広く行えた。また、今後もニーズに応じてこれらの資料を提供、頒布できる準備ができた。加えて、令和4年度に斜里町立知床博物館や蘭越町貝の館で行う展示物の作成も行えた。

主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
1. 蘭越町貝の館	文献情報の相談、製作物の展示
2. 北海道立北方民族博物館	執筆したエッセイを含む発行物の頒布

主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
1. ポスターによるオンライン学会発表	第69回日本生態学会大会 ポスター発表「北海道に残るアイヌ語地名は希少種の分布を知る手がかりになるか？-淡水二枚貝を例に」、2022年3月15日(予定)

以上